

## 大航海時代のウズ・ルジアダス ポルトガル

船釣りに血道をあげ、伊豆大島や銚子、下田、城ヶ島など千里の道を遠しとせずよく出かけた。釣りは早暁3時、4時に河岸払いし波頭をかき分け大海原を進む。やがて金色に輝く太陽が昇るとそれまで黒ずんでいた陸地がパッと明るむ。

船上で誰かがつぶやいた「ここに地果て海始まる・・・か」。海原から海と陸の境を眺めながら、なんと言い得て妙な上手い言い回しだろうかと思った。このつぶやきが詩なのか、何かの文章なのか、この人の即興か、以来記憶の底にこびりついてしまい思いがけない時にふっと頭をよぎる。大型客船で日本を離れるときも甲板で波頭をみながら、地果て海始まるかと思わず独り言が口をついた。

だが調べもせずうかつにも自分の頭の片隅に入れっぱなしであれから40年が過ぎ去った。そして仕事を離れ個人旅行でポルトガルを訪れた。バスの中でガイドがポルトガルを代表する詩人カモンイスが「ここに地果て海始まる」と詠んだと説明した。ハッとして40年間も頭の片隅にしまい込まれていた文言がポルトガルの有名詩人の一節だったとは・・・慌ててメモを取った。

ルイス・デ・カモンイス（1524年頃～1580年6月10日）は、ポルトガルの王家につながる家柄に生まれ、イエズス会などで教育を受け、ギリシャ語・スペイン語・ラテン語を学んだ。軍務に服しムーア人（北西アフリカのイスラム教徒、主にモロッコなどのベルベル人を指す）との戦闘で片目の視力を失った。

カモンイスは1553年ポルトガルの植民地であったインドのゴアで暮らし、次いでマカオへ行く。マカオで彼は大航海時代を主題とする勇壮な叙事詩「ウズ・ルジアダス」を書き上げ、1570年リスボンで出版した。“ここに地果て海始まる”は叙事詩ウズ・ルジアダスの中の一節である。ポルトガルはポルトガル語の文学作品を対象に非常に権威のある“カモンイス賞”を設けているし、紙幣には彼の肖像画が使われるなど、カモンイスは同国を代表する偉大な詩人である。56歳で没し世界遺産であるリスボンのジェロニモス修道院に葬られている。注）ルジアダス＝ポルトガル



ロカ岬 先端に小さく碑が見える



最西端到達証明書



ユーラシア大陸最西端 ロカ岬

ユーラシア大陸の最西端にあるロカ岬の先端は陸が切れ落ちた150mの断崖である。そこには十字架のある高い石積みの碑が建っている。その碑に「Onde a terra acaba e o mar começa=ここに地果て海始まる」と刻まれている。岬の近くにあるポルトガル観光協会では、ロカ岬を訪れた人たちに古典的な飾り文字で書かれた立派な「最西端到達証明書」を発行しているが、その文中にもカモンイスの一文を載せている。

エンリケ航海王子（=英語ではヘンリー航海王子）15世紀～16世紀にかけポルトガルは海洋交易によって繁栄を極めた。ポルトガルの国境は全



発見のモニュメント

て列強のスペインに隣接し陸路を通しての交易は困難であった。従っていきおい海路に向かわざるを得ず海洋国家への道を歩みだした。リスボンのテージョ川（スペインではタホ川）の河口には多くの冒険家や船乗りを見送った世界遺産のベレンの塔が聳えている。また近くには大航海時代の先鞭をつけた立役者エンリケ航海王子の没後500年を記念し建てられた”発見のモニュメント“がそびえている。高さ52mの帆船をかたどり大航海時代に活躍したヴァスコ・ダ・ガマ等27人の偉人たちの像が並びその最先端にエンリケ航海王子が

帆船の模型を抱えて海原を見つめている。

エンリケ航海王子（1394年～1460年）は、ポルトガル王ジョアン1世の3男である。探検事業や航海者たちに資金援助をし、また航海学校を設立するなどポルトガルの航海に関する大スポンサーであった。それまで未知の領域であったアフリカ西海岸を踏破させるなどエンリケ王子は大航海時代の先達の役割を果たしたが自らは航海に出ることはなかった。

エンリケ王子はキリスト教騎士団長として宗教的な情熱と共に多くの資金をも得ていた。また領土拡大を目指す父王のジョアン1世の意図にくみし、アフリカモロッコのセウタを征服し交易拡大に益し一躍ポルトガルの英雄となった。彼はアフリカの更なる征服を目論んだが失敗に終わる。

ヴァスコ・ダ・ガマ（1460年頃か～1524年）はポルトガルの探検家で、インド航路発見者として世界史の教科書にも掲載されている。

卓越した航海術に加え、外交手腕に優れた才能を持ったガマは、当時国力が最も充実していたポル



リスボンのテージョ河畔のベレンの塔

ポルトガルの王マヌエル一世からインド航路開発の命を受け、1497年4隻の船団の司令官として国王の親書を持って、総勢170名の乗組員を引き連れ首都リスボンを華々しく出航した。

アフリカ南岸を経て、1498年インドのカルカットに到着し3カ月間滞在した。遂にインドへの航路を発見したのである。ガマは帰国後ポルトガル王から絶賛され報奨金のみならず伯爵、インド総督に任命された。その後もインドへ赴き、三度目の航海で病を得てインドのポルトガルの根拠地コチンで没した。遺体はリスボン

のジェロニモス修道院に移され葬られた。ポルトガルはインド航路発見により、コショウを中心とした香辛料などの交易で巨万の富を得ることとなり同国に黄金時代をもたらした。

ポルトガル紙幣に肖像が使用されているのは、カモンイス、ヴァスコ・ダ・ガマ、エンリケ航海王子等である、いずれもポルトガルの英雄・偉人たちである。

フェルディナンド・マゼラン（1480年～1521年4月27日）はポルトガル出身のスペインの大航海時代の航海者で探検家であるが、彼はポルトガル王と不仲になり、スペインへ赴き同国の市民権をとった。

マゼランは1591年、スペインによって編成された遠征隊の指揮官として5隻の船団を率い、セビリアを出航した。マゼラン一行はアメリカ大陸を通過し太平洋を横断し3年の長年月を重ね1552年世界一周を成し遂げたが、指揮官マゼランは航海途中フィリピンで原住民と争い戦死してしまう。

マゼラン亡き後、部下であったファン・セバステイアン・エルカーノが船団の指揮を引き継ぎ1522年無事スペインに帰国し世界一周を成し遂げた。約3年にわたる大航海であった。出港時270名だった乗組員は、帰国した時にはわずか18名であったという。

この航海中マゼラン海峡、マゼランペンギンなどマゼランの名前を冠したものがいくつか知られている。因みに“太平洋”はマゼランが命名したとされる。

15世紀～16世紀にかけ、ポルトガルやスペインが先鞭をつけたに大航海時代は、その後アジア、アフリカ、中東へとヨーロッパ諸国が競って世界へ向けての航路を開発し、やがてヨーロッパは経済的なリーダーとしての地歩を固めていったのである。

ところでポルトガルがわが国に与えた影響は大きかった。1443年ポルトガル船が種子島に漂着し鉄砲を伝えたし、南蛮渡来と称し、様々な物品や食べ物がポルトガルからもたらされている。またキリスト教を信じる大名の名代として天正遣欧少年使節団がローマに派遣されたが、1584年リスボンに到着した一行はポルトガルの各地にその足跡を残している。